

書評

太田 剛 編著

『幕末讃岐の種痘医 神内喬木文集』

神内喬木(名謙, 通称捨蔵, 字仲輔, 喬木は号)は、文化14年(1817)、讃岐・三木郡井戸郷(現木田郡三木町)に19世紀初頭より明治年間まで続いた医家に生まれ、備前の難波抱節(1791~1859)から医学を学び、嘉永3年(1850)、抱節の次男玄貞から将来された種痘法を讃岐に広めた人物である。医学を修める一方、片山冲堂から漢学を学び、詩文もよくした。次子の由己(1854~86)は、高松藩医柏原謙好、謙益に学び、高松藩講道館を経て、東京大学医学部を卒業し、同大医学部から出された最初の医学士18名のうちの一人として知られる。喬木は教育熱心で、由己を東京に進学させるため、土地の一部や道具類を売却したという。由己は卒業後、大阪府立医学校校長兼院長、熱海に開設された日本初の温泉療養施設、嚙瀛館の初代医長となるなど医師として活躍したが、肺疾患のため父よりも早く32歳で亡くなっている。

神内家には喬木、由己を中心とした代々の蔵書、文書類が伝わり、後裔の國榮氏により管理されている。『神内喬木文集』はその一つで、全64篇からなる。評者は以前蔵書のうち医書類、および漢籍、和書などの古典籍について調査したことがあり、それによれば、医書には『傷寒論』など中国古典医書とその邦人注釈書、産科、痘科などの各種医方書、薬物薬方処方書、蘭方西洋医学書、近代医学書関係があり、漢籍には、四書五経、史書、諸子類、字典辞書類、詩文集類など基本的な中国古典文献、和書には神道・国学関係、漢学・漢詩文集、国文学関係、歴史・地理書などがある。医書のうち近代医学書関係は由己由来のものと思われるが、そのほか多くは喬木より伝わるもので、喬木が師抱節の私塾忠誠堂で書写したものもある。なお、それらは「神内家蔵書目録(医書・古典籍之部)」(『日本漢文学研究』第11号/二松

學舎大学東アジア学術総合研究所日本漢文教育研究推進室/2016.3)としてまとめたので参照されたい。

本書は「第一章 神内氏について」、「第二章 『神内喬木文集』訳注」、「第三章 参考資料」の三章からなる。文集本編については、著者によれば「本来の冊子の順番は、おそらく喬木が書いた年代順に置いたもの」であるが、「これを順番に読んでいくのでは、内容の理解が散漫になる怖れがある」ということで、原本の収載順によらず関連内容により配列を変更し、「神内家に関する文章」「医学に関する文章」「知人との交流に関する文章」「外国人との交流に関する文章」「歴史に関する文章」の五節に分類している。訳注は、西岡幹夫香川医科大学名誉教授の序に「読者が読み易いように、原文とその書き下し文、さらにはその現代語訳、関連資料も付けられており、理解しやすく、太田先生の教育者としての配慮がみられる」とあるように、原文翻刻、書き下し、現代語訳、その解説のほか、語釈、漢文語法の注釈も豊富である。また書影も全冊掲載され、翻刻の行字数はそれに合わせられているため、原典との対照も容易である。

文集本編では「医学に関する文章」にはまず「種痘論」「奉難波抱節先生」があり、喬木が種痘を讃岐に広める契機が記されている。それによれば抱節は、日本における種痘法の嚆矢として天然痘治療に貢献した緒方洪庵(1810~63)に種痘法を勧められるも、はじめは消極的なようであったが、洪庵の重ねての説得により種痘法を試してみるとその効果を認識し、以後積極的にその術を施したという。その後は清の邱煒撰『引痘略』を和訳した『訳引痘略』や『散花新書』などの種痘書を著している。そして喬木はその抱節の二著を授かり、それにより種痘法を習得し、実践していったとい

う。一般に岡山に種痘を広めた人物として周知される抱節が、当初はそれに懐疑的であったことは、ここで初めて明かされることであろう。伝染病としておそれられた天然痘は種痘により落ち着きを見せたが、代わって安政5年(1858)にはコレラが日本全国で大流行した。それについては「暴病論」があり、コレラに対して民衆が祈祷に頼りがちとなる状況と、医家に対しては自戒の念を込め治療知識の不足と不勉強を戒めている。ここには喬木の医師としての誠実さと同時に向学心が顕れている。

「知人との交流に関する文章」では、漢学の師片山冲堂に漢文の添削を乞う文章が散見し、喬木が医学だけではなく、漢文の習熟にも熱心であったことがわかる。日本と外国との交流について記した「外国人との交流に関する文章」には、漢文について記した「文論」があり、それには朝鮮通信使や、幕末、西洋から来航した商人の方が、日本人より漢文の能力に長けており、「世儒動輒曰、文不必学、果然乎、古聖之道幾乎熄矣、吁生乎今之世、而欲尚友古之人者、其唯文乎(世儒は動もすればすなわち曰く、「文はかならずしも学ばず」と。果たして然りや、古聖の道いくぼくかして熄まん。吁、生まるや今の世にして、古の人を尚友せんと欲する者は、其、唯文のみならんや)」(訓読は著者による)と、世の儒者は「漢文を学ぶ必要はない」などと言うが、古の聖人の道やすぐれた古人を友とすることができるのは漢文だけである、と漢文の重要性を説いている。これは今日漢文に接することを常とする人々も思いを同じくするところではないであろうか。

本書は『神内喬木文集』の訳注以外の章も充実している。第一章では神内氏の歴史と喬木とその子孫、また居住地域についての解説があり、第三章の参考資料には文集収載以外の喬木の文章や喬木宛の詩文の訳注、と文集の書影に加え、「神内家関係者略歴」「関係図」「神内喬木年譜」の三節がある。

関係者略歴には『喬木文集』に登場する人物や、喬木と直接関わった師、師友ばかりでなく、間接的に影響を受けたと思われる人物、また歴代の藩主、同時期に活躍した医学、漢学者も収載されている。関係図は「神内喬木を中心とする学統・交流図」と「神内家と親戚関係図」に分かれ、学統交流図は喬木を拠点として、直接の師からその学派の祖まで遡り、医学、漢学の一大師承図となっている。その図からは喬木自身の医学、漢学における位置のほか、医学史、漢学史上の著名な人物たちの意外な繋がりが見られ、発見がある。年譜は喬木と関わりの深い柏原家、難波家、片山家の事項のほか社会的事項など、略歴、関係図と同様にして喬木と直接的に関係しない事項についても記載され、喬木の生きた時代が具体的に知ることができる。

本書は、神内喬木という一地方の医家の文集の訳注書という域を超え、近世後期から明治にかけての学術の継承関係が知られる大変有意義な資料集ともなっており、斯学の研究者には座右の一書とされたい。

(清水 信子)

[神内國榮, 〒761-0704 香川県木田郡三木町高岡四條1831, 2020年3月, B5判, 370頁, 3,000円+税]

Henderson, JK

“Arthur Schüller: Founder of neuroradiology. A life in two countries.”

医学の歴史には、どのような人物が記録されるべきなのだろうか。著名な人物を挙げるとすれば、古い時代には、西洋で言えばヒポクラテス、

ガレノス、ヴェサリウス、プールハーフェのように、日本で言えば曲直瀬道三、山脇東洋、杉田玄白と前野良沢、華岡青洲のように時代を画する